一人一人を生かす集団保育

―グループ分けの工夫より―

山田　千明[1)]
伊藤絵里菜[2)]

キーワード：一人一人（個）を生かす、集団保育、学びの共同体、グループ分け

要　旨

本研究の目的は、山梨県内にあるＡ幼稚園の実践を検討し、一人一人を生かす集団保育の在り方を考察することである。素話等を用いて、一人一人の園児に相手の気持ちを考え、かつ、自分の気持ちを言語化して伝えることができる力を育もうと、Ｂ保育者は、その能力に応じてグループ分けを行ってみた。その結果、表現能力の低い園児は次第に意見表明ができるようになり、集団をリードすることが多い園児との衝突が起こるが、様々な活動を通して、多くの園児が他人の意見を聞き、また、自分の意見が表現できるようになった。お互いの意見を調整しながら他者との関わりあいを深め、幼稚園と保護者とが協働して「意味のある学びの共同体」形成に取り組むことが望まれる。

はじめに

幼稚園生活における基本的な集団は原則的にはクラスであり、多様な園児で構成されるクラスが担任教師と共に１年かけて学びの共同体を形成していく。一人一人を生かしながら集団を「意味ある共同体」として成長させていくためには、どのような価値や目的を設定し、どのような活動をするのか、保育者の役割とその具体的な在り方について考えてみたい。

さて、個性豊かな園児達が共に生活する幼稚園で、多様な一人一人とどう関わるのがよいだろうか。全員に全く同じ対応をする（「平等（equality)」）がよい保育と言えるだろうか。一人一人の違いに応じた「公正（equity)」な関わりをするためにはどのような配慮が必要だろうか。園児たちは、将来、平和で民主的な社会の形成者となることが期待されているが、その基礎を作るのが就学前教育であり、自発的活動としての遊びは幼児期特有の学習である。幼稚園では他児と関わり「協同的な遊びや学び」を通して、個も集団も育てたい、そのような保育を実現するためにはどのような方策が考えられるだろうか。

本稿では、山梨県内にあるＡ幼稚園において 2015 年度年少児クラス、2016 年度年中児クラスを担任したＢ保育者の実践を取り上げ、一人一人を生かす集団保育の在り方を考察したい。

（所　属）
1）山梨県立大学
2）認定こども園 聖愛幼稚園

１．Ａ幼稚園の概要：多様な集団づくり

Ａ幼稚園では少人数保育を行っており、年中・年長児について、１クラス定員18名までの2クラスが1つの部屋で保育を行っている。クラス単位の「クラス活動」を基本とするが、活動内容によっては２クラス合同、36名程度で「学年活動」を展開することもある。このような形態をとることにより、1)少人数クラス編成のため一人一人にきめ細やかな配慮ができる、2）担任教員間の経験差･資質の違いによるクラス間格差が軽減される、3）特別な配慮を必要とする園児への、より適切な対応が可能となる、等の効果がみられる。

さらに、毎週金曜日には、すべての園児を６グループに分け、終日、異年齢児混合での「縦割り活動」を展開している。

２．保育者の願い

Ｂ保育者には、相手の気持ちを考えられるようになってほしいという願いがあったが、園児達は、自分の意思を通したかったり、自分の話を聞いて欲しい気持ちの強さから喧嘩になったりすることがあった。強い言葉で自己主張する園児の意見が通り易く、控えめな園児はそれに従うという傾向があることを感じ、Ｂ保育者はどの園児にも自分の気持ちを言葉にして伝えることができる力を伸ばすにはどのようにすればよいか悩んでいた。

（１）2015 年度年少児クラスの状況

2015 年年少児クラスでは、クラスで毎日行う帰りの会で一人一人の楽しかったことやうれしかったことなど、Ｂ保育者が質問してクラスの園児の前で答えるということを繰り返したり、時にはペープサートを使用して物語を話したりしていた。この時の登場人物はどんな気持ちかそれぞれの意見を発表する活動を２学期の終わり頃から取り入れ、日常の保育の中でもトラブルが起きた時にはＢ保育者は、「今日こんなことがあったんだけど、どうすればいいかな。」と、相手の気持ちをクラス全員で考える機会を持つように心がけていた。ゲームや遊びをする時もＢ保育者は極力見守り、園児同士で考えて選択したり展開したりできるよう言語化して表現することが苦手な園児やなかなか意見を言えない園児に対しては、感じたことや思ったことをＢ保育者が一緒に言葉にして伝えられるように関わっていた。

３学期に入り、園児達は全体的に少しずつ自分の気持ちを相手に伝えられるようになってきた。そうすると、今まで控えめだった園児も他の園児に言い返したり、違う意見を出す機会が増え、手が出たり、言い争う場面もみられるようになった。Ｃ児は自分の意見を主張し、集団をリードすることが多かったため、自分の意見が受け入れられなかったり、言い返されたりする経験があまりなかった（事例①）。

【事例①】C児とD児の様子・2015年度1月下旬

お家ごっこで今まではC児が周りの配役や役割を決めて意見を通していた。D児は意見が違っても言い返せなかったが、３学期になりC児に言い返せるようになってきた。しかしC児も意見を曲げられない。C児は言い返すD児に手を出したり、理由をつけてかわそうとしたりして、次第にC児とD児は一緒に過ごさなくなってきてしまった。

B保育者は、帰りの会でペープサート等も活用しながら、オリジナルの素話をし、そのストーリーを聞いて園児たちがどのように思ったか、年少児なりに何を感じたか一人ずつに尋ねる機会を設けた。また、「今日楽しかったこと」「恥ずかしかったこと」「困ったこと」「悲しかったこと」は何かと質問し、クラス全員の前でそれを話す機会を設け、どの園児にも自分の気持ちを言葉にして伝える力の育成するための工夫を試みていた。

直接否定したり指導したりするのではなく、園児に自分の頭で考える機会を提供できないかとB保育者が語ってみたのが、B保育者のオリジナル作品の素話「こころの花」である。

（2）グループダイナミックス

2015年度A幼稚園でB保育者が担任した園児達は2016年4月に年中児クラスに進級し、いっそう自己主張が強くなり、体力もついてきたため、言葉での言い合いだけではなく、手が出るトラブルも多く見られるようになった。B保育者は前年度と同様、「自分の気持ちを言葉にして伝える」ことを目標に、帰りの会はクラスで一人一人が発言する機会を作り、友達の意見を聞く時間や自分で考える時間が日常的に持てるよう働きかけた。

筆者らは、第31回全日本私立幼稚園連合会関東地区教員研修で「一人一人を生かす集団保育の在り方」というテーマで発表することが決まっていたので2015年10月より2016年8月まで複数回事例検討の機会をもった(1)。そのディスカッションの過程で、山田が福井県立若狭高等学校の縦割りホームルーム制(2)の事例を出し、集団のダイナミックスを変えてみる方法もあることを提示してみた。すなわち、一般的に行われている学年別クラス編成では、

こころの花　　さく：伊藤絵里菜

こころはさみしがりやです。一人でいると、こころもさみしくてこころの花が咲きません。こころはおこりんぼうです。友達にいやなことをされると、すぐに怒って真っ赤な花が咲きます。こころはくいしんぼうです。なんでもほしくて、なんでもやりたくて、みんなとあそびたいのです。でもくいしんぼうは、時々わがままむしにお花が食べられちゃいます。こころはよわむしです。こわかったり、かなしかったりすると、こころのお花は枯れちゃいます。
こころはみんなの中にあります。みんなのこころの花はきれいに咲いていますか？
こころはお友達の中にもあります。お友達のこころの花も時々お世話してあげてね。

小学校からずっと意見の言えなかった児童生徒は高等学校を卒業するまで意見が言えないままのことが多い。そこで、高等学校のホームルームを縦割りにすることによって、どの生徒も３年生になると１・２年生をリードせざるを得ない状況に置かれ、それが、すべての生徒にリーダーシップを育てる契機になるという事例である。同時に、小学校からずっとリーダー役であった生徒にとって、高等学校第１学年ではすべての生徒がフォロワーの立場となり、初めてフォロワーの気持ちを体験することになる。

その話を受け、Ｂ保育者は園児のそれぞれの発達段階や集団での主張の強さによって同じようなタイプの園児を集め、意図的に３グループに分けて活動してみることにした。Ｘグループには、自分の考えを言語化し集団をリードすることが多い園児、Ｚグループには普段他児には自分の意見をほとんど表明しない園児、Ｙグループはその中間の園児を集めた。Ｂ保育者の仮説は、主張の強いＸグループの園児は周りの主張とぶつかり、すり合わせようとするのではないか、あまり主張しないＹグループの園児は自分が意見を言わなければいけない状況になり、主張するのではないか、Ｚグループの園児は、いつもは保育者にしか自分の意見を言えないが、新たなグループ内では友達に自分の意見を伝える姿が見られるのではないかというものであった。

ＸグループのＣ児は、主張の強い園児の中でも話の進行を主導し、「なんで一人だけ違うこと言うの。」と怒ったりすることもあった。しかし、一人一人の意見をきちんと聞いたり、アレルギーのある園児に「食べられる？大丈夫？」と気遣ったりする姿も見られ、Ｃ児なりに相手のことを思って関わる優しい一面も増えてきた。

ＹグループのＥ児は、日常では引っ込み思案であまり自分の意見を主張しないが、今回の活動ではグループ内で「こうしたらいいんじゃない？」と提案したり、率先して集団を引っ張ったりする積極的な面も見られた。また、ＺグループのＦ児は、年少児クラス在籍時から人に頼ることが多く、自分で考える経験が不足していたが、今回の活動では保育者の介入はあったものの、自分の意見を選択肢の中から選び、言葉にして主張することができていた。

今回の話し合いの活動では、主張の強い園児同士のグループは自分の意見を言い合うことはできるが、周りの意見を聞き入れることに難しさを感じた。日常あまり主張しない園児は、周りの意見を聞くことがうまくでき、自分から主張したり仕切ったりする姿が見られる園児もいた。個人差はあるが、意図的に同じタイプの園児を集めた集団にすることで、日常のクラスでは見られない園児の一面が見られ、同時に一人一

図　３つのグループに分かれての話し合い

人の個人差をじっくり見られる機会となった。

【事例２】話し合い（2016 年度５月）
１．クラス：年中児クラス（赤組・青組計 28 名を３グループに分けて実施）
２．ねらい：
日常のクラスとは違う集団（自分の考えをもち、それを他の園児に伝えたり、リーダーシップを発揮したりする度合いの強い順にＸ・Ｙ・Ｚの３つにグループに分ける）を作ることにより、集団の中で一人一人が意見を伝え合い、グループごとに意見集約ができる。
３．話し合いのテーマ：
キュウリ・ナス・トマトの３種類の夏野菜から自分たちのグループが育てる野菜を決める。
４．方法：
事前の打合せでは、記録をとるために保育者が一人ずつ各グループに入るが、保育者はその場にいるだけで、原則的には何も介入しないと決めていた。
５．話し合いの展開　※育てる野菜が決まったグループ順に記載
＜Y グループ（７名）＞
みんなそれぞれの意見を言い続け、しばらく決まらずにいた。G児が一人ずつ意見を聞いていくと、キュウリが人気の中、D児だけがナスを希望した。G児の「一人が言ってても決まらないよ。」という言葉がきっかけとなって、D児のナスという提案に周りの園児が賛同し、ナスに決定した。
３グループの中で育てる野菜が最初に決まったので、ＸグループとＺグループのヒントにしようと、保育者が園児達の前で「どうやって決めたの？」と質問。「Ｄくんだけナスって言ってたから、Ｇたちが変えてあげた。」とＹグループの園児は年中児クラス全員の前で答えた。
＜X グループ（11 名）＞
Ｃ児の提案でじゃんけんをすることになり、決まるまでひたすらじゃんけんをしていた。なかなか決まらないのでＣ児が一人ずつの意見を聞いていき、トマトが 10 人、キュウリが一人だった。キュウリを希望したＨ児が譲らずにいると、それに怒ったＣ児がＨ児の顔を叩いてけんかになった。保育者が仲裁に入り、再びじゃんけんをしているときＹグループの野菜が決定した。Ｙグループの決まった経緯を聞いた後、それに影響されたのか、Ｈ児の意見に合わせようとＣ児が提案し、キュウリに決定した。
＜Ｚグループ（10 名）＞
隣の子に小さな声で自分の意見をささやく子もいたが、飽き始めて誰も話さなくなり、保育者が経過を聞いた。保育者に対しては各自意見を伝えることができたが、子ども同士で話すまでは発展しなかった。今回は保育者が介入し、一人ずつ意見を聞いていって結論を導いた。
６．その後の活動
グループごとに育てたい野菜をプランターに植え、水やりをして育て年中児クラス全員で収穫。給食の野菜が苦手な子も、周りの勢いに乗り食べられるものから少しずつ食べ、収穫した野菜はすべて子どもたちで食べ切った。

（３）個の育ちと仲間意識の醸成

意図的グループ分けで、それぞれの特性をもつ園児は少し変化していったが、2016 年度６月上旬には、事例③のように、学年で一体感をもち、協力する姿が見え始めた。

初めはＣ児の主張が通らず、Ｃ児がいら立ったり、怒ったりする反面、違う園児と

遊んだりその場を離れたりはしない繊細な部分が観察された。「やりたくない」と言ったが、C児に構わず他の園児が遊びを継続したことで、C児も様々な感情を感じたのではないかと考えられる。

今回はC児と仲の良いH児の動きも効果的で、H児が周りの意見を取り入れようとみんなに提案することで、集団が動く場面も見られた。

C児の意見を聞かない園児や自分の主張ができるようになってきた園児がどんどん増えてきたことにより、意見の衝突場面も多いが、意見が通らない時や同意を得られない時の気持ちを確実に相互が経験し、園児同士の育ち合いが集団でいる良さである。

この事例では年長児との関わりもあり、年中児だけでは経験できなかった展開があり、また、遊具の使い方の工夫なども見られた。

年少児クラスだった 2015 年度から、主張の強い園児が集団を引っ張っていく様子が多く見られる集団だったが、クラス・学年・縦割りグループ・目的別のグループなど多様な集団を意図的に作り活動の機会を準備すると、意見をぶつけ合いながら育ちあっていく姿がみられる。

お互いに意見を聞き合って友達同士で意見交換ができる園児、まだ自分から相手に伝えるのは難しいが、保育者が質問したり共に考えたりすれば自分の気持ちを相手に伝えられる園児など様々で、個人差はあるものの、少しずつ自分の意見を言うこと、人の意見を聞くことが身についてきた。

３．「個を育てるグループ分け」の意義

幼稚園には、自分の考えを言葉で表現することが得意な園児もいれば、苦手な園児もいる。A幼稚園の事例では、自分の意見を表現する機会の度合いで保育者がグループ分けを行ってみた。自分の発言で物事が決まることが多い園児には自分の主張が通らない経験を、また、発言の機会があまりない園児には意見を言わなければ何も決まらない状況を意識的につくることで発言せざるを得ない雰囲気を準備する、これは「公正」の一つの試みであると言えよう。

さて、ここで保育者の役割について考えてみたい。幼稚園教育要領解説（2008）では、集団における個々の園児への指導で大切なこととして、園児一人一人が主体的に取り組んでいるか、一人でいる園児については、日々の様子をよく見て、心の動きを理解することが大切で、教師は状況判断により、適切な関わりをその時々にしていくことが必要である、と述べられている。また、一見集団で遊んでいるように見えても、主体的に取り組んでいない園児がいる場合について、環境の再構成と教師の援助が必要であると言及している。

【事例③】自由遊び（2016 年度６月上旬）

年中と年長の男の子が朝の自由遊びの時間にジュウオウジャーなどヒーローになりきって、戦いごっこを始める。戦いごっこへＣ児を含む年中の女の子グループが年中側に来て、「Ｉ～がんばれ～」「まけるなー」と各自好きな男の子の応援をし始める。一番人気のＩ児がやられそうになり、H 児が「私たちも行くわよ！」とプリキュアに変身して戦いごっこに参加。変身して年長児にも向かっていく園児たちを見ていたＣ児は「ねえ！なんでそんなことやってんの！お家ごっこするって言ったじゃん！」と言う。Ｃ児の強い口調に E 児はびっくりして振り向き、従おうとするが、戦いごっこの方に参加する。

誰も自分の意見を聞いていないことに怒り、Ｃ児は「もういい！しらないからね！」と言い残してその場を立ち去るが、すぐに戻って来る。

Ｃ児「ねえ! なんでみんな来ないの!? 」納得いかない様子でその場にしばらく立っていると H 児が寄ってくる。

H 児「Ｃもやろうよ！なんのプリキュアがいい？」

Ｃ児「やらな～い。絶っ対つまんないし。」

そこからＣ児を誘う園児はいなくなり、Ｃ児は近くの遊具に腰掛けてじっと戦いごっこの様子を見ている。

戦いごっこの中では、H 児、E 児、D 児がプリキュアに変身して年長児に向かって行く。年長児の力が強くてなかなか勝てずにイライラし始めるが、プリキュアに変身しているので役になりきって３人が相談を始める。

D 児「キュアミラクル！敵は強いわよ！どうすればいいの？」

H 児「本当よ！私たちに力を！」と言って天を仰ぐ仕草。

E 児「ねえ、きっと白帽子にすれば力が出るわ！はやく白帽子にするのよ！」

D 児・H 児「そうか！そうだったわね！」帽子を裏返してまた年長児に向かっていく。みんながどんどん戦いごっこに参加し、状況が変わってくると、Ｃ児も自分からまわりを巻き込んで応援し始める。「ねえ、Ｃに合わせて！ば～ら～ぐ～み～！ば～ら～ぐ～み～！」

見ていると参加したくなったＣ児は、プリキュアのキャラクター・モフルンになりきってみんなに呼びかけることにしたようだ。

Ｃ児「みんな！はやく私の体に触るのよ！そうすれば力が出てくるわ！」みんな戦いに夢中で聞いていない。Ｃ児は数歩前に進み、

Ｃ児「ねえ！Ｃがモフルンになるから、Ｃにさわると力が出てくるってことにしない？」

H 児「うん、そうしましょう！」

Ｃ児が加わったことにより、Ｃ児の決めたルールを加えて遊びが少し発展したが、D 児と E 児は初めは納得していないようで、Ｃ児のところには行かなかった。その後、H 児が D 児と E 児を誘ってＣ児のところへ行くようになり、Ｃ児も楽しそうに遊びに参加した。

年中児が男女で戦いごっこに参加すると、年長児は年中児の勢いが出てきたことで、休憩を求めるようになり、近くの三角屋根の遊具を「パワー補給所」と設定し、疲れたらそこへ行って休憩し、パワーを補給したらまた戦いに加わるというルールができた。

戦いを見に来たが参加することはしない年長組の J 児は、補給所に来た園児の治療係をしていたが、三角屋根にある２本のロープをマイクに見立てて、戦いの実況をし始める。

J 児「（Ｃ児たちの応援に合わせて）ゆ～り～ぐ～み～！ゆ～り～ぐ～み～！ゆりぐみ強いです！がんばってください！ゆりぐみが１番大きい子どもだから勝てるぞ！」

この日は片付けの時間になり、戦いが終わった。終わる時には年長児が「お前たちなかなか強かったな！」と年中児を讃え、年中児は「まあな！」と返して満足そうに保育室に戻った。

Ｃ児のグループも、「今日のところはこれで終わりね！」と変身を解き、いつも通りの様子に戻って保育室に戻ったが、戻ってからも強かった年長児をかっこよかったと言ったり、次は誰が何のキャラクターになるかを相談したりしながら盛り上がっていた。

※ ばらぐみ（年中児クラス）、ゆりぐみ（年長児クラス）

また、学級については、学級は園児にとって仲間意識を培う基本集団で、教師は一人一人のよさを認め、学級として打ち解けた温かい雰囲気づくりを心掛け、園児が安心して自己発揮ができるようにしていくことが必要であり、また、友達関係から仲間意識へと発展し、「自分たちの学級」という意識が生まれる、という。さらに、教師同士が連絡を密にし、互いの見方を話し合うことで多様な視点からの幼児理解が深まると述べ、教師間の協力体制が大切であると言及している。

次に、森上史朗ら編（1992）『集団ってなんだろう』という本の中の永田陽子の記述を参考に保育者の役割について考えてみたい。園児にとっての集団（生活の場）は、「安心して過ごせる場」、「一人一人が自分のしたいことができる場」である必要がある。「したいことができる」というのは、自分もできるし、また、隣の園児も同様にできなければならない。「個」としての育ちと「集団」としての育ちの両面への目配りが必要で、永田の「集団のカラーができ始めると、集団の中での園児同士の見方が出てきます。」「固定的な見方が出てきてしまった時には、できるだけ早く修正していく努力をしていかなければなりません。」という指摘は非常に重要である。

差別や偏見の芽生えとなるような保育材が置かれていないか、そのような環境構成になっていないか、保育者自身の言動に固定観念に基づくものはないか等常に留意し、もし、固定観念に基づくような園児の言動が観察されたら、速やかに、保育者同士が協力し園全体でそれを是正する必要がある。

また、永田は、保育者の役割を「働きかける」ことと「見守る」ことの２つに整理しているが、「働きかける」ことには、個々や仲間に働きかける「直接的働きかけ」と、他の園児に橋渡しをしてくれるように言葉をかけてみたり、環境構成に工夫をしたりする「間接的な働きかけ」があると言う。さらに、山田が実際に観察したケースでは、わざわざ「不便」な環境を設定したり、人数より少ない保育材しか準備しないことにより、その中で園児同士が順番で使う等考えて意見調整を行えるよう配慮したり、危険察知能力を育んだりしている幼稚園もある。

「見守る」ことについては、A幼稚園は、園児の主体性を尊重し、見守る姿勢で保育を展開している。A幼稚園の個を育てるグループ分けの試みでは、「自分の気持ちを言葉にして伝える」個の育ちと「自分の気持ちを表現できる場づくり」という集団の育ちを援助するため意図的な集団を作るのだが、この事例の特徴は、集団を柔軟に捉え、環境の再構成をしていることである。

さらに、「自分の考えを言葉で表現する」ことについて取り上げると、自分の思いを表現する媒介は「言葉」だけではない。目と目で話をすることもあるし、また、嫌な表情をするだけでも嫌だという思いは伝わる。このように、非言語的コミュニケーションも含め、コミュニケーションにはいろいろな手段がある。「自分の考えを伝える」ためには、まず、「自分は○○を伝えたいんだ」という○○に当たるものがなければならない。加えて、「聴く力」すなわち、誰かが伝えようとしている事をキャッチして受け止める力も重要となる。「話す力」

と「聴く力」の両方が重要なのである。

目の前にないものをイメージし、豊かな人間性を育むためには幼児期にたくさん美しいものを見、美味しいものを食べ、嬉しい体験、悲しい体験をたくさんする必要がある。特に悲しい体験をしていないと、誰かが悲しんでいても相手の気持ちが理解できない。自分生活経験を通して「あの子は今こう感じているのではないか」と推測し、それを基に行動することも可能となるのである。

おわりに：意味のある学びの共同体の形成

ここで「意味のある学びの共同体」について考えてみたい。金子みすゞの詩「私と小鳥と鈴と」に「みんなちがって、みんないい」というフレーズがある。従来の日本の教育が「みんな同じ」にウェートが置かれていたのに対し「みんなちがって、みんないい」という多様性尊重の考えは素晴らしい。しかし、皆がバラバラの事をしていては「意味のある共同体」とはならない。違ったところを認め、それを尊重し、補い合って新しい文化・集団を形成する、園児達の違ったところを認め、それを尊重するには、「この子にはこんな所がある」「あの子にはこんな所がある」とそれを受け入れるだけの「ゆとり」が保育者になければならない。

「みんなちがって、みんないい」とは言うものの、実際の幼稚園生活においては、保護者を意識した指導、例えば、保護者向けに展示する作品製作の際に、保護者に喜んでもらえる作品をと考え、園児の個性をそのまま表現するというより、見栄えが良いように保育者が指導するケースもあると聞く。理想と現実は違うので難しい所はあるが、保護者も巻き込んで「園児たちの作品は未熟かもしれないが、ここで大人が手を入れて何か一つの方向に無理に向かわせることは決して園児たちのためにならない。」「成長のプロセスにあるお子様の今の姿を見ていただきたい。」と保育者が強い信念をもって言えるとよい。「意味のある学びの共同体」を作るためには、それに理解を示す保護者集団の存在が不可欠である。

幼稚園と保護者とが協働して「意味のある学びの共同体」形成に取り組むことが望まれる。

【注】

（１）第 31 回全日本私立幼稚園連合会関東地区教員研修埼玉大会の打合せ会は計 8 回実施された。構成メンバは次の通り（敬称略）である。鈴木信行（山梨県私学教育振興会幼稚園部部会長）・上田京介（山梨県私学教育振興会幼稚園部教育研究委員長）・中村多惠子（みかさこども園園長）・奥野真子（甲府西幼稚園主幹教諭）・深沢真美（貢川幼稚園園長）・今福千恵子（韮崎カトリック白百合園長）・伊藤絵里菜（聖愛幼稚園教諭）・渡邉光太（聖愛幼稚園教諭）・塚原尚子（富士幼稚園主任）・穴水登志子（富士幼稚園園長）・山田千明（山梨県立大学）

（２）縦割りホームルーム制については福井県立若狭高等学校編（1997）『「縦割りホームルーム制」の実践』を参照されたい。

【引用文献】

（１）福井県立若狭高等学校編(1997)『「縦割りホームルーム制」の実践』

（２）文部科学省（2008)『幼稚園教育要領解説』、フレーベル館

（３）森上史朗・今井和子（編著）(1992)『集団ってなんだろう：人とのかかわりを育む保育実践』、ミネルヴァ書房

【付記】

本稿は、第 31 回全日本私立幼稚園連合会関東地区教員研修埼玉大会（於大宮ソニックシティ、2016 年 8 月 24 日）フォーラム６「一人一人を生かす集団保育の在り方」で行った発表をベースとして論文としてまとめたものである。公益社団法人山梨県私学教育振興会幼稚園部会の関係者はじめ多くの方々に多大なご協力をいただいた。ここに記して厚く御礼を申し上げたい。

Early Childhood Group Care and Education for Enhancing the Individual Value of Each Child：Through a Trial of Grouping, Based on the Ability of Expressing His or Her Own Views

Chiaki Yamada[1)]
Erina Ito[2)]

Abstract

The purpose of this research is to examine the practice of A kindergarten in Yamanashi prefecture with regards to finding a way of enhancing the value of each individual child within an early childhood care and education group. B teacher nurtured each child's ability to consider the feelings of another person and to verbalize their views through the use of storytelling and so on.

Grouping was based on each child's ability of expressing his or her own views. After the nurturing procedure, children with low expressive ability gradually became able to express their own views. While this trial caused conflicts between those children who initially had low expressive abilities and children who had always taken leadership roles, these experiences enabled many children to begin listening to others and better able to express their own views. Resulting in the children of this class： deepening of their relationships with others; being better able to adjust their views of each other; and in the formation of "a significant learning community".

Keywords:
Enhancing the Individual Value of Each Child, Early Childhood Group Care and Education, Learning Community, Grouping,

1) Yamanashi Prefectural University
2) Seiai Kindergarten